

大空 (生徒・保護者向け) 48号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和3年10月14日(木)

感動を与えられる人になる—様々な「分人」を生きた人 清水幹裕氏—

□本日の概要

- 1 分人とは自分を構成する様々な要素である。好きな分人を増やし大切にすることが豊かで逞しい人生につながる。
- 2 東大野球部出身の清水氏は、野球に携わるため官僚をやめ弁護士に転職し、二つの分人を極めた人である。野球を通じ、多くの感動を若者からもらった。
- 3 清水氏は、「何事にも諦めないでひたむきに努力でき、相手を讃えられる人間になれ。」「大人に感動を与えられる若者であれ。」と語っている。
- 4 自分が何かを好きであることは、自分の人生を支えるだけでなく、周囲を支える可能性がある。自分の中の様々な分人を大切にしたい。
- 5 本日のNFC 感性 自他肯定力 想像力



○甲子園で観戦する清水氏(HPより転載)
清水 幹裕氏(しみず つねひろ1942年 -)

弁護士 清水法律事務所

1967年 東大法学部公法コース卒業。東大野球部OB、1966年～2007年 東京六大学野球審判員、1980年～2000年 高校野球審判員

愛知県出身の元アマチュア野球審判員であり弁護士。東大野球部選手時代は外野手。愛知県立岡崎北高等学校から東大を経て、旧文部省入省。その後弁護士へ。

□「分人」とは何か

校長通信47号で、「夢を複数持つこと、そして、この考え方は分人という考えにつながる」という話をしました。「分人」は「個人」に対応する言葉として小説家の平野啓一郎氏が作った造語です。個人という言葉は本来は西洋の概念で、神に対するときの自己として生まれました。西洋は一神教ですので、神に対応する自己というもの一つだと考えます。しかし、日本はもともと多神教であり、神に対する自己も、場面に応じて使い分けてきました。しかし、明治になり西

洋の「個人」という概念が輸入されると、従来の日本的な考え方は一貫性がないと考えられるようになったのです。(例えば漱石を読むと、「自分とは何か」ということに迷う人物が良く登場します。)さらに現代になると、自己が一貫していないことを「仮面」という比喻で表現するようになりました。人と人との付き合いは表面的なもので、本当の自分は別であると考え、人間関係が空しいものに見えてきます。しかし、平野氏は、自分を構成している様々な要素を「分人」と名付け、自分の中に矛盾した要素が存在していることでも肯定的にとらえたのです。そして、自分を構成している様々な分人の中で、好きな分人を増やし、大切にすることが、豊かで逞しい人生につながると考えており、私は共感するものがあります。

自分の興味関心がどの方向に向かうのか、自分が本当にやりたいことは何なのか、中高生の段階では良く分からないものです。今、好きなこと、興味があることだからといって、それを職業にできるとは限りません。だからといって、好きなことや興味のあることに全く目を向けないのも無理があります。興味関心が絞れない自分や、矛盾している自分を否定的に捉えることはありません。進路というものは、一本道ではありません。迷いながら、回り道をしながら模索を続け、気がついたら一つの山を登っていたというものです。最初に目標とした山とは別の山に登っていたこともよくあります。まずは、原点である、好きだ、興味があるという気持ちを大切にしてください。

□様々な分人を生きた人々、弁護士 清水幹裕(しみず つねひろ)氏

様々な分人を生きた人を紹介します。清水さんは、弁護士と、アマチュア野球の審判という2つの分人を生き、それぞれを極めた人です。私は、ある教育関係の研修会で彼の講演を聞きましたが、優秀な弁護士である傍ら、高校野球の審判員を40年も続け、故星野仙一(明大、日本代表、元楽天監督)をはじめ、法政大学時代の江川投手や、甲子園で松阪、桑田、松井など、数多くの名勝負、有名選手のジャッジをしてきたという経歴の人物です。弁護士としても優秀で、専門の法律問題についても、様々な訴訟事例について、豊富な体験を下に、分かりやすい説明をされています。

清水さんは東大で4年間野球部に所属し、文部省(現、文部科学省)の官僚になります。しかし、どうしても野球を続けたいため、文部省を辞職し弁護士に転職します。役所は自分の時間が取れないが、弁護士は自分の裁量で仕事の調整ができるというのが理由ですが、簡単にできる決断ではありません。野球を通じて、多くの感動を与えられたため、どうしても野球を

続けたかったのだそうです。野球の中でも、彼が選んだのはアマチュア野球の審判という道でした。(無報酬です。)そして、野球審判を通じ、多くの名選手、名監督、すばらしいチームと出会ったのです。清水さんはもう審判は引退されたようですが、皆さんが今取り組んでいる部活動や趣味なども、職業にはつながらないにしても、人生を支える何かになるかもしれません。

清水さんの審判人生にはには、学ぶことがたくさんあります。せっかくだから、講演で話されたエピソードをいくつか紹介します。

口あきらめないこと、努力することの尊さを学ぶ

清水さんによれば、東大野球部は、東京6大学リーグでは一番弱いチームということですが、練習はどの大学より一番多く一生懸命やっているそうです。その東大野球部で、清水さんの後輩に金田君という選手がいました。金田君は、高校時代は柔道部に所属していたので野球経験はありません。野球がとても下手な選手だったそうです。

金田君は、東大野球部の練習が終わっても、一人で黙々と練習をしていました。不器用だから、下手だから一生懸命やるのです。しかし、一生懸命やっても結果は出ません。清水さんが「大丈夫か」と声をかけると、「大丈夫です」と明るく答え、また練習を続けるのです。その彼が、初めてヒットを打ったのは3年の時。ところが、その金田君が4年生ではヒットを十数本打ち、6大学リーグの打率トップ10に入るという実績を出します。清水さんは、「あきらめないこと、努力することの尊さ」を金田君の姿から学んだといいます。ちなみに、もっと努力をしたら名選手になったはずなのに清水さんが悔やんでいたのは清原選手です。高校時代の才能は桁違いのものがあつたそうです。天才的な投球術を持っていたのは江川投手だと語っていました。江川は審判さえ幻惑する投球をしていたようです。

口感動を与えてくれた若者たち

さて、清水さんが出会った高校球児は、プロになるような選手ばかりではありません。ひたむきに、野球に打ち込み、努力を続けた選手たちが殆どです。「アマチュア野球審判の一番の醍醐味は、感動する場面にあえることだと思う。夢中になって戦う選手の息遣いを聞きながら、真剣に生きることの素晴らしさを実感した。」と清水さんは語っています。

清水さんの感動した選手は尽きません。4年間1度も出場できなかった早大の4年生が、学生最後の「早慶戦」で初めてバッターボックスに立ち、震えながら振ったバットに当たった打球が内野安打になったことがあつたそうです。彼は1塁ベースに立つと、突然号泣しはじめました。審判をしていた清水さんは、はじめは何事かと思ったが、すぐに感激の涙であることが分かり、胸が熱くなったといいます。

甲子園にも名試合が多くあります。中でも、清水さんが主審を務めた夏の甲子園の決勝戦に、1991年第73回大会があります。試合は、大阪桐蔭対沖縄水産。結果は13対8で大阪桐蔭が勝って優勝するのですが、試合終了の挨拶をした時、沖縄水産のキャプテ

ンが相手選手に向かって「おめでとう」と声をかけたそうです。それもおざなりでなく、満面の笑みをうかべて、心から優勝を祝福しているのが、ありありと感じられるものでした。審判の清水さんは、大勝負に負けた直後の18歳の少年のこの爽やかさは、どこから来たのだろうかと思いたつたそうです。

この大会、沖縄水産は大野倫(おおのりん)投手(九州共立大、ジャイアンツ、ホークス、九州共立大学職員を経て、NPO法人「野球未来」の理事長)たった一人が全試合を投げ抜いたそうです。全投球数は800球に近く、決勝戦の投球など、主審をしていた清水さんでも打てるのではないかと思うほど遅い球だったといいます。しかし、大野投手はマウンド上でも苦しそうな態度を全く見せず、力の限り投げ続けます。(決勝戦終了後、疲労骨折していたことが分かります。)

清水さんはこう語っています。

「自分達のした事に対する満足感と誇りが、大旗を逃した悔しさを超えたのだろう。人は、自分のした事に満足し誇りを持った時、初めて相手の成功を讃えることができる。高校生に身をもって教えてもらった。」

口夢に向かってひたむきな努力を続けよ

清水さんはこう語りました。

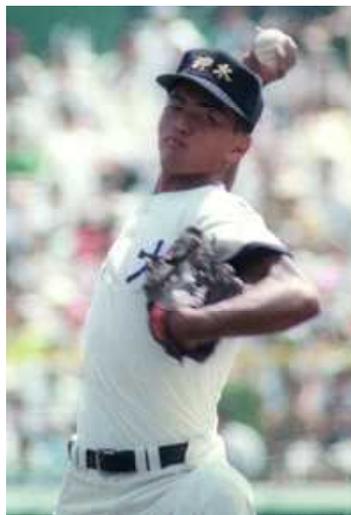
「何事にも諦めないでひたむきに努力でき、相手を讃えられる人間になれ。」

「大人に感動を与えられる若者であれ。」

清水さんは、野球を通じて、このような境地に至りましたが、これを清水さんに教えたのは、他でもない、一生懸命に努力する高校生です。

皆さんが、それぞれの夢や希望を掲げ、部活動や勉強など、高校生活の様々なことに頑張ること、あるいは家庭での生活を大切に、自分の分人を豊かにすることは、自分の人生を豊かにすることにつながります。趣味としてやっていることが、一生を支える何かになるかもしれません。それだけではありません。皆さんが様々なことに努力することは、皆さんの周りの多くの人に感動を与え、勇気づけることにつながるのです。

自分が何かを好きであること、何かに一生懸命に取り組んでいることは、自分を支えるだけではなく、自分の周囲も力づける利他的な行為です。自分の中の、様々な分人を大切にして、育てていってください。



力投する大野選手(高校時代 HPより転載)

○参考
平野啓一郎 「私とは何か―『個人』から『分人』へ」
講談社現代新書(2012)